慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジヨン・スチュアート・ミルの功利主義に就て
Sub Title	
Author	宇佐美, 洵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.1 (1924. 1) ,p.98- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240110-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て社會批評に轉せしめたるはこの「建築の七燈」の中に說かれたる敎義であると云ふエフ・ハリソンの說は當れりとしなければならない。

斯くして轉じたるラスキンはヴェニス建築に關する速急の研究が左程多くの年月を要する事なくして完結するものと考へてゐたらしく又他方に於いては「近世畫家論」も今一卷を以つて終りうるものと考へてゐたらしい。併しラスキンの性質は凝り性であり熱狂的熱中的であつた、故に一度轉じたる研究の新方面は一八五六年「近世畫家論」第三卷の現はれるまでに其間七年を費し上記の建築に關する名著作は五篇を算ふるに至つた。

併し吾人は一八四六年以後四八年に至るまでの二年間に就いて先づ語る必要がある。四六年は主として建築の研究に費され又大英博物館内に於いて研究した。併し一八四六年より七、八年に亙つては文筆的勞作比較的に尠く病氣に惱む所多く且つは家庭上の出來事も彼の著述的生活に著しき發展を許さなかつた。（未完）

ジョン・スチュアート・ミルの功利主義に就て

宇佐美洵

一

吾人は功利主義を以て、人間行爲の善惡決定の標準は功利或は快樂なりとするカンバーランド以後英國に興りし倫理的主張を意味せんと欲す。

ジエレミー・ベンサムは屢〻功利主義の模範的代表者と云はれ（Albee: A History of English Utilitarianism, p. 165）恰もそが創始者の如くに思はる。（Rogers: English and American Philosophy since 1800, p. 52）又彼と最もよく比較さるべーレーが彼の唯一の倫理學書の序文に極めて明白にタッカーの非常なる影響を受けたるを記するに反し、彼は自ら常に功利理論の創設者の如く書錄する。實に彼の弟子 Bowring に依つて記せられし會話の中に、ベンサムは他人に負ひし唯一の恩惠がプリーストレーの著政府論に最大多數の最大幸福なる語の偶然使用されたる事實に深く印象を受けた一事のみであるかの如く云ふのである。（Albee: Ibid. pp. 165-165）。

乍併、功利主義はアルビーの指摘せる如く、ベンサムが諸書を著し、彼及びミル父子が公衆的快樂說より演繹して社會及び政府に對し彼等獨自の見解を大成する以前、既に本來の倫理說として大なる發展をなし來れるものであつた。（Albee: Ibid. Introduction xii）。遠くカムバーランド此後ヒューム、アブラハム・タッカー、ウイリヤム・ペーレー等を經てベンサムに至つた思想家の一系統である。

ホッブス以前に於ては一般に、人間意志の唯一可能なる內容は個人の利益或は害惡なりとされた。然るにそれ以後に至り、倫理行爲の標準は、吾人の同胞の利益の爲めの行爲の結果の純粹なる心理學的方法に求められた。道德性は獨り社會體の內のみに存在する。彼の爲め、而して彼のみの爲めなら個人は自己の禍福を知る。併し社會に於ては人間の行爲は他人に與ふる利害に依つて判斷さる。是れのみが倫理判斷の標準として是認される。（Windelband: A History of Philosophy, p. 512）。

リッチャード・カムバーランドは自然法を以て有ゆる道德及文明智識の基礎なりと主張する。

(Albee: Ibid. p. 15)。曰く「理性者の總ての組織に於ける公共の善 common good を增進すべき吾人の可及的努力は所有ゆる善を助成せしむ。その中に部分としての吾人の幸福が包含される。而してその反對の行爲は反對の結果を產み、爲めに自己の悲慘は他の悲慘の中に存する」と。(Cumberland: De degibus naturae p. 16)。かくて彼は公共の善は最高の目的にして標準であり、從つて他の有ゆる規則及び道德はそれによつて決すと爲せし第一人者であることに據り著名である。(Sidgwick: History of Ethics, p. 174)。これ彼が英國功利主義の眞の建設者と云はれ (Albee: Ibid p. 1)、或は後期功利主義の先驅者と稱せらるゝ所以である。(Sidgwick: Ibid. p. 174)。

吾人は彼の倫理觀がやがてバトラー及びペーレーの如き神學的道德學者のみならず、プリーストレー及びハートレーの如き聯想心理學者により認得せらるゝを見る。かくて一つの行爲は倫理的に快樂が增加するに從ひその割合にて幸福は增進す、而して一方幸福に參與する人數が增すに從つてその幸福は大となる。即ち倫理の理想は最大多數の最大幸福である。これが功利主義の標語となり、(Windelband: Ibid. p. 513)、近世歐洲に於て、良心ある人々をして彼の信仰の上に相爭ふ主張を判斷する地利を得せしめ、且彼等をして矇昧無智なる一致に代るに、批判的智的一致を以てせしむるに至るのである。(J. H. Green: Prolegomena to Ethics, 1906. p. 397)。

二

第十八世紀より十九世紀前半に亙る英國道德哲學思想は非常に意見の紛糾せる時代であつた。就中倫理標準の問題及び道德能力の本質に關する問題に就いて著しかつた。ハッチソン、シャフツベリーの如き moral sense philosopher は良心と感情とを同化し、Benevolence を以て人間に於ける最高の道德原則と主張した。又監督バトラーの如き intuitive moral philosopher は良心を以て本質的に合理的なるものとし、自發的にして無上の權威を有する獨立的能力に打建てた。(W. L. Davidson: Political Thought of the Utilitarianism, p. 45) ベンサムは這般の所說を論駁して云ふ、「正邪の標準に關して今迄述べられし諸種の體系は要するに論者一個の好惡に歸すべきである。」(Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, p. 17) 即ち「Moral sense, common sense, understanding, reason, right reason, nature, natural law, natural justice, natural equity, good order, truth の如き有ゆる言は畢竟自己の命令に服從せしめんとする人々の獨斷のみ」と。(Bentham: Reontology, vol. I, chap. iv, p. 71)。

然らばベンサムの倫理的思想は如何。英國に於ては第十六世紀以後自然科學の勃興に伴ひ、倫理學も亦その影響を受け自然科學的なる研究方法を用ひた。ベンサムも此の傳統に從ひ彼の倫理學は人間性の研鑽に始る。

ベンサムに從へば、「自然は人間を快樂及び苦痛なる二人の帝王の支配下に置く、何をなすべきかを示し、又何を爲さんかを決心せしむるものは獨りこの帝王である。一方に於ては善惡の標準、他方に於ては因果の連鎖は此二人の玉座に結付けらる。」而して「吾人が如何に此從屬關係より脫却せんと努力しても、其努力は却つて益〻關係を緊密ならしむるに終るのである。」(Betham: Intro. to the Principles of Morals and Legislation, p. 1)。彼は斯の如き人間の心理的事實より出發して功利說を樹立する。彼によれば功利主義は此從屬を認め且之を以て其哲

學の基礎となすものにして、理性と法則との手によりて幸福の殿堂を建立せんとするのがその目的である。

彼謂へらく「功利主義とは或る行爲の影響を蒙る人々の幸福を增減する傾向によつてその行爲を肯定し又は之を否定せんとする原理を云ふ」と。(Bentham: Ibid. p. 2)。從つて彼の所謂善なる行爲とは公共の幸福を增進する傾向が之を減少する傾向よりも大なる行爲である。何故ならば公共とは個人がその成員となりて成立ち得る假作的團體をいふ。かくて「正しきや誤れるやの尺度となるものは、最大多數の最大幸福である。」(Bentham: Fragment on government, p. 93)。

彼は快樂を獨り數量的にのみ考察し、その間に性質の差を顧慮しなかつた。その結果彼は最大幸福の測定法に就き極めて科學的客觀的なるものを發見するを得た。彼は快樂の價値はその强度・繼續・確否・遠近並びに生産力・純粹性及び延長性の合計七箇條に照合して計量さるべきを云ふ。(Bentham: Principles of M. and L. pp. 29-32)。彼は又快樂苦痛の發生する淵源を四分する。即ち自然的・政治的・道德的及び宗教的のそれである。この四者に別名を附して制製sanctionとする。何故ならば是等四者に屬する快樂は吾人を或る法則に向つて强制する力を有するからである。若し吾人が最大幸福の原則に相反する行爲をなすとき、以上の四方面に吾人の快樂が減ぜられ苦痛が增加するのである。(Bentham: Ibid. pp. 24-28)。

併しベンサムは功利說が正確なる原理なる爲めに如何なる證明が可能なりやとの質問に對して不可能なりと答へる。何となれば事物を論證する爲めには何物かを前提とし、原理を假定するを要する。乍併論叙の連鎖は何れかにその發端を見出さねばならぬ。其發端となる原理の證明は不可能不必要である。即ち第一原理は證左を許さない。ベンサムは斯法に依りてsenとsollenの問題を解決せんとする。然れども吾人はこれのみにては何故自己の快樂を犧牲にして最大多數の最大幸福を求むるが善なりや不可解である。

倫理學に科學的方法所謂method of detailを適用せしことはベンサムの一大特徵である。ジョン・スチュアート・ミルがベンサムの主要思想を解說したDumontの立法論を讀みて感心せしことが二つあつた。一つはベンサムが人間の意見及び制度法規が如何なるものであるべきかを論じ、功利主義の原則のみ獨りこれを解決し得とせし點であるが、他の一はこの科學的形式を適用せし手腕である。即ちベンサムが「自然の法則」「正しき道理」「道德心」「自然の正義」等の文言より演繹し來れる世間一般の道德及び立法に於ける推論法を何等理由なき獨斷說とし、自らは行爲の結果の快樂苦痛といふ倫理學上の原則を指針として科學的分類を用ひた點である。(J. S. Mill: Autobiography, 1873. pp. 64, 65) 換言すればベンサムは法律倫理等の社會科學に自然科學と等しく經驗を普遍化の立場より發展構成して計量的概念によつて認識し系統付けんとする方法を採つたのである。此處に吾人は彼がウイリヤム・ペーレーと別れ、非神學的功利主義者と云はるゝに至りし所以を見出す。此の點に關じアルビーが「ベンサムの倫理學に對する非神學的議論は單に彼の個人主義的態度を示すに過ぎない。それ自身に於て倫理學說の一進步を示すものではない。」(Albee: History of English Utilitarianism, p. 163) とするのに讃し

難い。何故ならば神學的倫理說は「神のみ獨り有ゆる場合人間を幸福に或は悲慘にす」と主張し死後の褒賞のみを希念するものにして、斯の如きは人間の要求に基く人爲の要素あることを忘却せんとするものである。然れども吾人はベンサムの斯法に全然同意し、その完全を認めんとするものではない。何故ならば本來快樂は主觀的感情にして各人其の快樂苦痛とする所を異にし、之を客觀的に計量するが如きは不可能事だからである。

更にベンサム說の長所且短所なるは旣述せる如く、彼が快樂に專ら量的區別をのみ認めしことである。素より經驗派に屬するロック、ヒューム等の至大なる影響を受け善惡を判斷するに先天性を否定し、求むるは只感官的快樂であるとする彼が、快樂の性質を認めず專ら數量に依りてのみ區別するは當然である。併し之に依つて「詩と留針とを比較して快樂の量が等しければ兩者の善も等し」(J. S. Mill: Dissertations and Discussions, vol. II. p. 198)といふが如き奇異なる決論に到達するに至るも論理的當然と云はねばならぬ。

這般の特長と弱點とをベンサムの功利主義は併合する。之を要するにベンサムによりて取扱はるゝ人間は只之外界の快樂を求め苦痛を避くる生物に過ぎない。制裁の法則に從つて運命論的に動く機械に過ぎない。彼が倫理學に沒價値的科學的方法を適用したことは倫理學の一進步なることは是認さる。併し更に一步進みて人間性を凝視するとき、其處に不滿不悉を感ずる。洵にこれが完成は彼の思想上の嗣子ジョン・スチュアート・ミルに殘されし至上なる義務であつた。

三

ジョン・スチュアート・ミルの功利主義的思想の最も簡明に表示さるゝものは彼の「功利主義論」である。一八六一年 Fraser's Magazine に寄稿されしものにして、上梓されしは二年後の一八六三年である。

思ふに彼の功利的倫理說はその精髓を分ちて次の三となすことを得る。（一）彼の快樂なる概念に關してゞある。師ベンサムが專ら量に關してのみ考索したるに反し、彼は質をも併せ研覈した。從つてミルに於ては質的相違の決定法が問題となる。（二）功利主義遵奉の動機如何の問題である。ベンサムが制裁に外部的のものゝみを求めしにミルは內部的制裁を兼考し、人間の社會的感情、良心等を認めた。（三）功利主義の證明方法である。ベンサムが殆んど斯題に關知せざるに反し、彼は聯想心理學を利用して論斷した。

吾人は次に順次以上の諸問題を檢討するであらう。

四

ミルは幸福を以て人間唯一の目的と考へた、(J. S. Mill: Utilitarianism, 1874, p. 10) 而して彼はベンサムと等しく行爲はそれが幸福を增進する傾向に準じて善であり、幸福の反對を造る傾向に從つて惡であると主張する。(J. S. Mill: Ibid. p. 9)。然るに彼の幸福なる概念はコートネーの云へるが如く可成り曖昧である。(W. L. Courtney: Life and Writings of John Stuart Mill, p. 133)。當初に於ては單に幸福は快樂、苦痛の缺如を意味し、(Mill: Utilitarianism, p. 9)、やがて品位の感覺は幸福の本質的部分にして、幸福は滿足なしに存在すとなし、(Ibid. p. 14) 進んで人間の望しき唯一のものを意味し (Ibid. p. 52)、かくて幸福の成分は非常に多くそは單にあ

るもの丶集合にあらずと斷ずるのである。(Ibid. p. 54)。換言すれば最初單に快樂的感情を意味せし幸福なる概念が、やがて人生の願望或は尊祟を意味し、遂に吾人が望まざるべからざる最大幸福となる。然れども吾人に最も興味多きは彼が師ベンサムに反し、敢然として快樂に質的區別を附加せし點である。

何故質的差異を設定せしや。曰く人生が快樂以上の高き目的を有さずと想像することを豚のみに適する學說なりとする古今に亙る輕侮に對抗する爲めである。(J. S. Mill: ibid. p. 10)。即ち彼は斯の如き非難は豚の享持し得る快樂以外の快樂を人類が享受し得ざるものと想像するより生ずとなし、人類にはより質的に高き快樂の存在するを主張す。かくて彼は「他の一切の事物を評價するに當り、質も量と共に考量せられ乍ら、獨り快樂の評價が量のみに依らざるべからずとするのは不合理である」と斷定する。(ibid. pp. 11, 12)。

ミルに從つて質的差別を認むるときその優劣は如何にして決定する乎。彼は云ふ「唯一の答があり得る。二つの快樂あり、その快樂に就てその經驗する總て若しくは殆んど總ての人が選ぶに道德的義務の感情に關せず、その一を必ず採るとするならば、そは他よりも望しき快樂である」從つて二者の中その一が「不滿足の一層大なる量を伴ふを知るに拘らず、そを選ぶに他の上位に置く」ならば、「吾人はその選れし快樂に質に於ける優越を認むるは當然である」と。(ibid. p. 12)。

ミルは二つの事物に同樣に通曉し觀賞し得る人々が、彼等の一層高尙なる才能を必要とする生活の方式を選ぶといふ事實を明かに認める。(J. S. Mill: Ibid, p. 12)。而して品位の感覺Sense of dignity がかくさせるといふ。優秀なる人は同等の境遇に於て劣等なる人より幸福に非ずと想像する人は幸福と滿足とを混同するものである。享樂の能力の劣等なるものは最も多く滿足の機會を有することは疑へない。併し高尙なる才能を與へられし人は常に望むべき何等かの幸福の存在を感ずる。されば彼は云ふ「滿足した豚となるより不滿足なる人間となるが善である。滿足した愚者となるより不滿足なるソクラテスとなるが善い」と。(ibid. p. 14) かくてミルは二つの快樂の中何れが價値あるか、或は二つの生活態形の中その道德的の屬性及び結果を離れて何れが氣持ち良きかの質問に對し、その兩者の智識を有する人の判斷が決定的であらう。若し彼等の間に意見の相違するときは大多數の判斷が決定的であらうと答へる。(ibid, p. 15)。

疑もなく、かくの如くミルが質的區別を認めしことは論理上必然なる矛盾に陷る。何故ならばレスリー・スチィーヴンの云へるが如く、水一立方呎は鉛一立方呎よりも輕しといふ意味は理解し得るも、快樂は之を互に比較し、其の價値を計るは不可能にして、慈善の快樂の幾何が食欲の快樂の幾何と相均しといふが如きは全く無意味である。更に快樂は主觀的感情にして、愚人の欲望するものが愚人の快樂、賢人の欲望するものが賢人の快樂にして、その間何等の相違の存するを許さない。ミルの云ふが如く智的快樂が感覺的快樂に優るとなすは絕對的眞理でない。そは種々なる事情に從つて定る。聖者も一杯の水を宗敎的耽想よりも選ぶ時がある。(Leslie Stephen: The English Utilitarians, vol. III., p. 305)。洵に「吾人の評價が感情以外のものであれば、快樂間の質的區別は可能であらう。併し

吾人がベンサムの心理學説を採用する限りそは不可能のことである。」(Courtney: J. S. Mill, p. 134)。

ミルが人間行爲の善惡決定の標準として快樂を選び、而もそれに質的區別を設けしは到底自家撞着なることを免れない。吾人は當然の結果として標準としての快樂の代りに寧ろ快樂に對する標準が必要となる。ミルは一方に最高の標準として快樂を唱へ、他方には自ら知らずしてヴィンデルバンドの指摘せる如く、快樂の標準としてプラトンの如く、經驗、智識及び理性に訴へる。(Windelband: A History of Philosophy: p. 667)。善の標準を説明するに善の觀念を以てする。

吾人は以上に於てミルの倫理説が論理上の循環論に陷つたの見た。然らば何故明晳なる彼をして斯の如き誤謬を敢行せしめたか。ベンサムは既述の如く人間を沒價値的に律せんとし、自然主義的人生觀を抱いた。然るにミルはコールリッヂ等の手を經て理想主義の洗禮を受け、人間を斯の如く一個の生物として、價値的個性を度外し、其行爲を一般的因果の法則に從つて説明せんとする試みに不滿を感じた。吾人は一八三八年に發表されし彼が「ベンサム論」により之を論證する。

ミルは曰く「ベンサムは思ふに人間は快樂及び苦痛に動かされ易きものである。一部は自利の種々なる形及び利己として普通に分類せらるゝ、熱情により、一部は他人に對する同情、時には反感によりて總ての行爲は遂げらるゝと。早くも此處にベンサムの人間性に關する概念は行き詰る。」「彼は人間が靈的完成を目的として追求することの出來るものとは認めなかつた。唯自己の內的意識より湧く善を希望し惡を恐怖するといふ心のみに動かされて、唯其事自身の爲めのみに人間が自己の性格を優秀なる水準に引上げやうとする欲求を持ち得るものと認めなかつた。此の心は良心と云ふよりも廣き內容を有するものにして、良心と云ふ狹き形に於てさへ人間性に此の大事實あることは彼の注意を脫した所である。」「自尊といふ言も又其の言に相當する觀念も、私（ミル）の記憶する限りに於て彼の全書を通じて唯一回も出て來ない」と論破する。(Mill: Dissertations and Discussions. vol. I, pp. 358. 359)。

次に彼はベンサムのなせし業績が單に物質的利益をのみ追求するを駁する。ミルは云ふ、ベンサムは「人事の businessの部分が即ち人事の總てゞあると想像する誤謬を犯し」(Ibid. p. 366)、「彼は社會の靈的利益に何のなす處がなかつた」と。(Ibid. p. 365)。又ベンサムによれば政府とは「數にて示せる多數」の權威である。ミルは之に反對して、多數の力は「個人の人格を尊敬し、修養ある智者の少數に敬意を表する限りに於てのみ救世的のものとなる」と。(Ibid. p. 381)。

本來ミルに從へば人間行爲には道德、的審美的及び同情の三方面がある。(Ibid. p. 387)。然るにベンサムは藝術的情操的本能が如何に道德の方面に入つてくるか見ることが出來なかつた。(Courtney: J. S. Mill, p. 63)。さればミルは云ふ「彼は人間性のより深き源泉を知らなかつたので、かくの如きものが如何に深く人間の道德性及び個人並びに人類の教育に入つてくるかを考へなかつた」と。(Mill: Dissertations. vol. I. p. 389)。

斯の如くミルは良心を認め、人間の靈的方法を重要視し、審美的情操的方面に注意した。又

彼はストアの要素及びキリスト教の要素を敬愛し、これ等も亦功利主義に包含せらるべきを信じた。(Mill: Utilitarianism. p. 11)。

更に吾人はミルが人間の個性に就き多く論ずるを見る。「自由論」第三章「幸福の一要素即ち個性」と題する中に、獨人フンボルトの著「政府の範圍及び義務」より引用して曰く「漠然たる刹那の欲望に依るに非ずして永遠不易の理性の命ずる人間の目的は、彼の能力をして圓滿充足なる完全に最も高き最も適合せる發達をなさしむるに在る、故に萬人が不斷に努力せざるべからざる對象は、殊に同胞に影響を與へんと計る者の絶へず眼を注がざるべからざる對象は力と成長との個性である」と。(J. S. Mill: On Liberty. the Scott Library pp. 106, 107)。かくて彼は個性の要素として freedom 及び variety of situation を尙び多數の壓迫を批難する。彼は心の成生を見た。彼は人間の完全を理性の永劫無窮の理想と考察した。此處に於て吾人はミルが一八二六年夏より冬にかけての憂愁時代に「爾の人生に於ける目的が悉く實現され、爾が庶幾つている諸の制度や人心の改善が今といふ今完全に成就したと假定せよ。そは爾にとりて大なる喜悅であり幸福であるか」といふ自問に對し「否」と答へざるを得なかつた事實を考證する。(J. S. Mill: Autobiography. pp. 133, 134)。何故ならば憂愁時代以前――ベンサム信奉時代――のミルにとつて所謂最大幸福は有限であつた。――しかし慧智なる人間の欲求する目的はそれ以上でなければならぬ。自然主義を以て人生觀を立つることは本來人生觀が價値理想目的に關するものたる以上不可能である。何故ならば自然主義に於ける最大幸福觀は經驗の價値を沒却して、そこに內在する理想を無視する。彼は前述の自問に對し「一の抑へ難き自覺が明確に」「否」と答へしめたといふ。當時彼は自ら知らずして自然主義的人生觀より離れんとした。而して「自由論」に於て內心の成長を絶叫するのである。吾人は思ふに實にミルが快樂に質的差等を設けしことは理論上の矛盾であるが、思想上に於ては倫理學說の一進步一回轉であつた。(Davidson: Utilitarianism, p. 181)。

五

然らばミルは如何なる動機の下に功利主義を遵奉する乎。彼はベンサムと共に制裁の說を採り、而も制裁を分ちて外部的と內部的となす。(J. S. Mill: Utilitarianism, p. 40)。ミルは謂へらく「外部的制裁は吾人の同胞若しくは宇宙の支配者よりの恩寵を希ひ、不快を恐れることである。」「何故ならば一般の幸福以外に道德上の義務の基礎が存するや否やは別として人間は確かに幸福を欲するからである」と。(Ibid. pp. 40, 41)。

彼に從へば「義務の內部的制裁は吾人の義務の標準が何であらうと同一である。即ち吾人の心に於ける一感情である。」「この感情はそれが公平にして、義務の純粹なる觀念と結合し、その特殊な形式若しくは何等かの單なる附屬的の事情と結合しない場合には良心の精髓である。」(Ibid. pp. 41, 42)。そこに拘束力生じ、その義務を破棄するとき恐くは後に至り悔悟に遭遇するであらう。それ故に總ての道德の究極の制裁は（外部的動機は別として）吾人の心に於ける主觀的感情であるから、功利主義者はかゝる特別なる標準の制裁は何であるかの問題に對し、何等當惑する所なく人間の良心の感情であると答へることが出來る。

彼は道德的の感情は生得のものに非ず、後に

植込まれしものと思索する。併し「若し何等か生得するものその間に有りとすれば」「若し直覺的義務的なる何等かの道德原理ありとすれば」「他人の快樂及び苦痛に關する感情」なることを斷言する。(Ibid. p. 44)。かくて「人類の社會的感情」生じ、「吾人の同胞と一致せんとする欲望」と化す。而して彼に從へば、そは幸にも特別に敎へられずして、進步し行く文明の影響によりて益々力强くさる。それ故社會狀態が人間に對し自然的必然的通例にして、非常なる事情の下か若しくは自發的の孤立の努力に依らざる限り、人間は團體の一員としてより、以外に自己を認識し得なくなる。(Ibid. p. 46)。「各個人は殆んど本能的に當然に他人を顧慮する存在として自己を自覺する (Ibid. p. 48)。勿論大多數の個人には、そは彼等の利己的感情に比して遙かに微力或は無力なることすらあり得る。併し之を有する人に對しては、そは全く自然的感情の總ての性質を具備する。「これ無くしては不可なる一屬性の如く思惟さる。」この確信がミルに依れば最大幸福道德の究極の制裁である。(Ibid. p. 50)。されば彼は云ふ「ナザレのイエスの金言の中に吾人は功利主義倫理學の全精神を見る。『己の欲する所を他人になせ。己の如く隣人を愛せよ』は功利主義道德の理想的完全である」と。(Ibid. pp. 24, 25)。

アレキサンダー・ベインは斯の如きミルの思想を以て道德的情操の始源に關する極めて卓越せる所言なりと推稱する。然れども吾人はレスリー・スティーヴンと共に論中に大なる瑕疵を發見する。

ミルは父ジェームス・ミルの影響により、善惡正邪は行爲の結果に依りて定め、行爲の結果と動機とは全く無關係なりと思考した。併し例へば異端者を殺すは、その動機が恨にしても將愛にしてもその結果は同一である。行爲の善惡を計量するに、そが包含する一切のものを考察するを要する。動機を廣義に解する時、動機は道德を構成する。行爲の善惡と人格の善惡との間に區別がない。善行とは善人の實行する行爲である。斯く考ふる時、吾人はミルの外部的制裁に不滿を感ずる。何故ならば「外部的制裁とは善人ならずとも善人の如く行爲せしむる動機をいふ。」そが社會に必要なること、又之が眞正の道德の發達に益するものなることは明かである。乍併結果道德は品位そのものゝ發表に外ならない。從つて道德に對する普遍的制裁の發見は空想である。斯の如き動機は道德的動機に非ず、斯の如き制裁を發見せんとする企圖は道德の皮相的又は不完全なる見解を包含するものである。實にミルの缺點は外部的制裁を以て內部的制裁と同等のものと做し、全く道德的に非ざることを見るに失敗せし所に存する。(Leslie Stephen : The English Utilitarians. vol. III., pp. 309-312)。

六

功利主義は如何なる證明を許す乎。ミルは云ふ吾人の智識及び行爲の第一原理は證明を許さない。併し若しありとすれば、例へば或る對象が見えるといふことに與へ得る唯一の引證は實際にそれを見るといふことにして、吾人の他の經驗　源泉に就いても皆同樣であると (J.S. Mill: Utilitarianism, pp. 5-6, 52-53)。されば彼に從へば、一般に幸福が望しきものなる理因は各人が幸福を獲得し得ると信ずる限り自己の幸福を欲するといふに在る。

彼に依れば「目的に關する問題は換言すれば如何なる物が望しきかの問題である。」從つて

幸福は人間が現實に望むといふ事實より出發して人間の目的となる。目的の遂行は即ち善である。かくて各人の幸福は各人の一つの善となる。それ故に一般の幸福は總ての人の集合にとつて善である。そは道德の標準の一となる。併し單に之のみにては之が唯一の標準なりや否や不明である。ミルは彼の所謂聯想の法則Law of Associationを適用し、德なる實例を引用して幸福が唯一の道德の標準なることを證明する。

ミルは功利主義論第二章に於て「快樂及び苦痛よりの自由は目的として望しき唯一のものなり」といふ。(Ibid. p. 10)。思ふに人間は快樂を目的として行動することもあり得る。然も同時に快樂を手段として他の目的の爲め勞力する場合もあり得る。ジエームスは譬を以て論じて曰く、快樂が欲求の目的なりとの說は恰も石炭を消費せずして汽船は海上を進行し得ざるが爲めに汽船は石炭消費の動機以外の目的に依つて海上に出ずること能はずといふに均しと。(James: Psychology, vol. II, p. 558)。さればミルと雖も前述の如く快樂を以て唯一の目的なりとする傍ら快樂を目的とせざる行爲を考察せざるを得なかつた。

吾人は聯想主義を彼の「論理學體系」第六編Logic of Moral Senseに見出すであらう。彼に從へば心理學の目的は或る心的狀態と他の心的狀態との繼起の統一法則を決定するにある。二法則あり、第一は一度吾人に感ぜられし意識は之を感ぜしめたと同一の原因無くして之を再現せしめ得といふので、ヒュームにより全ゆる心的印象はそれ自體の觀念を有すと云はれたものである。第二は這般の觀念は聯想の法則に從ひ吾人の印象或は他の觀念によつて再現せしめられ得といふのである。聯想心理學は三つの法則を有す、(一)類似の觀念は相互に聯想す。(二)二つの印象が同時に或は連續に屢〻經驗され、しかもその一の觀念或は印象が再び想起されし時、他の觀念と聯想され易し。(三)同程度のIntensityを有する二つの觀念は相互に刺戟し聯想すといふのである。(J. S. Mill: A System of Logic. 1919, p. 557)。

彼はこの法則を利用し、人間が快樂及び苦痛の缺如と等しく德及び惡の缺乏を望み、或は幸福以外に人間の目的が存在すとなす諸反對說に答へた。

ミルに從へば功利主義者は德をそれ自體善と認むる事に決して反對しない。如何となれば幸福の成分は頗る多種に涉り、各成分はそれ自ら望しきものだからである。德は自然に始初より目的の一部ではない。併し斯くなることを得るものである。例へば金錢は最初滿足の手段である。併し金錢の愛は單に人間生活を動かす最强の力なるのみならず、多くの場合それ自體欲望さる。金の所有欲は利用欲よりも屢〻强度である。その時金は目的の爲め欲望せられずして、目的の一部となる。同じことは人生の大多數の目的にも云ひ得る。功利主義の認識に從へば德も亦この種の善である。かくて彼は云ふ「あるより高き目的への手段、而して究極には幸福への手段としてゞはなしに、何物かゞ欲求せらるゝとせば、そは幸福の一部として欲望せられるのである」と。(Mill: Utilitarianism, p. 57)。

同じ法則により彼は堅固なる德或は目的を有する人は、その目的を考慮するに當り、現有する快樂或は目的を實現して取得すべき快樂を毫も見ることなくして其目的を遂行すといふ反對說に答へる。彼によれば能動的現象たる意志willと受動的狀態たる欲望desireとは異る。

而して意志は最初欲望より出發するが次第に自ら根を生じ親より離れ遂には通常の目的の場合には吾人が欲する故に意志するに非ずして、意志するが故に之を欲する。之即ち習慣の力である。(Mill: Ibid. p. 59)。

斯の如くミルは人をして彼は Hedonistic Paradox に墮せりと云はしむる程 (Davidson: Utilitarianism, p. 182)、這個の法則を利用し、巧みに人間性を利己的なるものより利他的のものに迄推論し行くのである。

七

人間性の利己か利他かの問題は洵に困難なるものにして、ベルサムは兩者の解決に何の寄與する所がなかつた。ミルに至り人間は本源的に利己なりとし、而も聯想の法則に訴へて恰も生得の如くに社會的感情を案じ、之によりて兩者の調和を求めた。然れども吾人はこの兩者の相衝突するを豫想し得ざるか。思ふにこれ心理學上のミルの繼承者ベインが同情を以て純正なる無欲の衝動と考へし所以である。(Bain: Emotion and the will, p. 295)。ともあれ彼等はシヂュウキックの指摘せる如く社會の一般的利益と個人の道德的に示す所を調和させんとするに一致した。(Sidgwick: History of Ethics, p. 252) ヴィンデルバンドの所言の如く實に個人主義に伴ふ道德價値の社會的規準と利己的動機說との結合は當時の英國學說の一般的傾向であつた。何故ならば時の言論に於て社會は恰も社會の各員を爲すものと考へらるゝ個人によつて構成された疑體であると定義された。社會の利益はその社會を構成する各員の利益の總計である。從つて社會の利益を增進する手段は有ゆる人々が自己の利益を求むるにありと云ひ得たからである。(Windelband: A History of Philosophy, p. 663)。

スチーヴンに從へば功利主義は人間を彼の存在する環境によつて支配さるゝ無色の一枚の紙或は本源的原子と思考した、此の主張によれば社會は人間と云はるゝ原子の集合である。各人は幸福を欲す。而も幸福は數にて示され且小分さる得る一種の感情的潮流である。行爲の道德性はその假設的潮流の體積を增すや減ずるやによつて決す。(Courtney: J. S. Mill, pp. 135, 136)。

ミルも斯く考へた依つて生じたるものが人性構成學 Ethology or the science of formation of character である。ミルによれば、歸納科學なる心理學は第一段に、必然的に演繹的科學なる人性構成學は其の次位を占め、後者は前者と社會學との連鎖をなすものである。(Albee: A History of English Utilitarianism, p. 263)。

然るに突如として吾人は一八四四年四月三日附のコムト宛の書翰に思慮未だ熟せざるを以て人性構成學を中止すと書くミルを見る。(Leslie Stephen: The English Utilitarians, vol. III., p. 51)。思ふに斯學は人間の性格が環境に支配さるといふ一定の法則に基き存在すといふ前提の下に立つ。勿論ミルの生涯人間が因果の法則によつて左右さると信じてゐた。同時に彼は人間に內在する精神を認め、個性の成長を視た。後以前の因果的方法は唯前件後件の必然隨伴を表すのみで、人間精神の本來有する自發性を否認した。ミルは之を否認すること能はず、而も英國學說の桎梏より全然脫却するを得ず。されば斯の如き不徹底を見るに至つたのである。

吾人は更に這般の消息の露示を功利主義論刊行後　年にして出版されし Examination of Sir W. Hamilton に見出す。コートネーによればそは明白にミルが理想主義に接近せることを顯は

すものである。卽ち吾人の外界の有ゆる觀念を思索の主觀的感情に持ち行くのである。(Courtney: J. S. Mill, p. 137) 吾人は彼の思想の中にロック、ヒューム等によつて代表さるゝ經驗派とカント等によつて導かるゝ理想主義との結合の最も敎示的なる說明を觀る。

論者或は云ふ功利主義程槪念的混雜に支配された學說は嘗て存在しなかつたと。(阿部次郎氏倫理學の根本問題九三頁)。吾人はミルの諸書を讀みて屢々此の感に襲る。併し彼がよく感覺的快樂を以て滿足せず、人間の內心に介在するものを求めしことを認めねばならぬ。彼は功利主義の理想は一般人士が高尙なる性格を養成することに依つてのみその目的を達成し得ると云ふ。(Mill: Utilitarianism, p. 16) 彼の尊ぶ所は精神の修養であつた。

トーマス・ヒル・グリーンは英國經驗派の努力を稱して、智識の世界より精神の作用を消滅し、智識の對象を貧しき受動的感覺に短縮せしことにあるとする。(Rogers: English and American Philosophy since 1800, p. 221)。然れども吾人はグリーンの善或は神とは自己の可能性の實現なりとする思想 (Ibid. p. 224) と這個のミルの學說との間に相共通なるものを見出すのである。

八

一八七三年五月八日佛國アヴィニョンAvignonにジョン・スチュアート・ミルを失ひ今方に五十年の星霜を經過した。

憶ふに倫理說としての功利主義は旣に十九世紀の後半二三十年間に大體その基礎を失つた。(Albee: A History of Utilitarianism, Intro. xii)。然れども過去半世紀に亙りミルの最大幸福說が實際上の功利說運動の根元となり、法律或は政策の問題に顯著なる功績を殘へたるの事實は何人も之れを認めざるを得ざる所であらう。

貨幣數量說の史的考察

萩原吉太郎

凡そ經濟學上諸說相頡頏して紛々たる論諍を惹起したること貨幣價値の問題より甚しきは無い。就中、貨幣數量說は恒に其論議の焦點に位し、其現在具有する內容形態に到達する迄には峻烈なる難詰と幾多試練の間を經過したのである。從つて今斯說發達の迹を遡つて這個の消息を探求するも强ち徒事でもあるまい。私は以下主なる學者の著書を必要なる限度に於て引用檢討して其一斑の窺知に務め度いと思ふ。

I　John Locke

John Lockeを以つて貨幣數量說の鼻祖となすは今や學者間の通說である。乍併斯說は決して彼に依つて創見せられたるものに非ずして、唯單に彼を俟つて初めて比較的鮮明に表現せられたに過ぎ無い。從つて彼に附與するに鼻祖なる冠辭を以つてするは必しも允當ではない。斯說の萠芽は旣にJean Bodin の Résponse aux Paradoxes de M. de Malestroit touchant l'encherissement de tous-les choses et des monais. 1568. の裡に發見せられ、次いで其意見は W. S. の A Compendious or brief examination of Certayne ordinary Complaints of diverse of our Countrymen in these our days: which although they are in some part injust and friuolous throughly debated and discussed, by W. S., Gentleman 1581. に依り踏襲せられ、更に降て Rice Vaughan の A Discourse of Coin and Coinage: the fierst Invention, Use, Matter, Forms, Proportions and Differences, ancient & Modern, with the Advantages of